

教育委員会月報



文部科学省

Series 地方発! 我が教育委員会の取組

「さいたまSTEAMS教育」の推進

～教科等横断型の探究的な学びの充実～ さいたま市教育委員会

不登校児童生徒のための中間教室の多様化を模索して

長野県伊那市教育委員会

山江村「海幸・山幸プロジェクト2021」

～令和2年7月豪雨からの復興を目指す「鎮山親水」の取り組み～

熊本県山江村教育委員会

お知らせ



2022年9月22日発行 第74巻6号

2022 September





Series 地方発! 我が教育委員会の取組

「さいたまSTEAMS教育」の推進

～教科等横断型の探究的な学びの充実～

さいたま市教育委員会 [1](#)

不登校児童生徒のための中間教室の多様化を模索して

長野県伊那市教育委員会 [6](#)

山江村「海幸・山幸プロジェクト2021」

～令和2年7月豪雨からの復興を目指す「鎮山親水」の取り組み～

熊本県山江村教育委員会 [11](#)

お知らせ

「高等学校外国語科におけるパフォーマンステスト参考資料」について

文部科学省初等中等教育局教育課程課 外国語教育推進室 [15](#)

OECD国際成人力調査(PIAAC)の実施について

国立教育政策研究所 [16](#)

「さいたまSTEAMS教育」の推進

～教科等横断型の探究的な学びの充実～

はじめに

AI やIoTなどの急速な技術の進展により社会が激しく変化し、多様な課題が生じている今日においては、これまでの文系・理系といった枠にとらわれず、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成が求められている。

さいたま市教育委員会では、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に活かしていくための教科等横断的な学習を充実させるために、「さいたまSTEAMS教育」を推進している。

学)、Technology (技術)、Engineering (工学)、Art (芸術・リベラルアーツ)、Mathematics (数学)) に、本市独自にSports (スポーツ) を加え、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に活かしていくための教科等横断的な学習である。

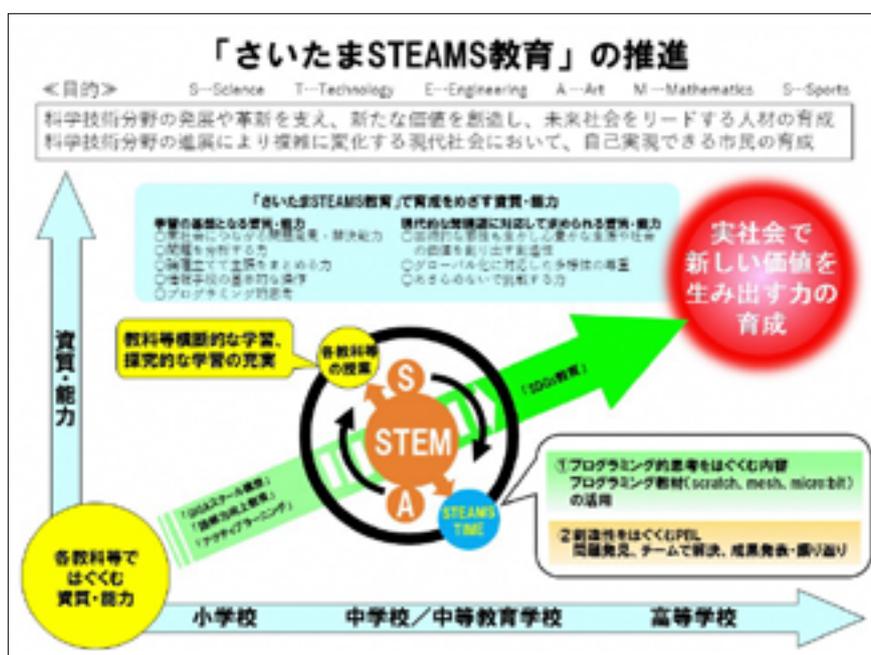
その目的は、「科学技術分野の発展や革新を支え、新たな価値を創造し、未来社会をリードする人材の育成」と「科学技術分野の進展により複雑に変化する現代社会において、自己実現できる市民の育成」である。そして、「さいたまSTEAMS教育」に取り組むことにより、子どもたちに「学習の基盤となる資質・能力」や「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」を身に付けさせ、実社会で新しい価値を生み出す力を育成していく。

1. 「さいたまSTEAMS教育」

「さいたまSTEAMS教育」は、STEAM教育(Science(科

<学習の基盤となる資質・能力>

- 実社会につながる問題発見・解決能力
- 問題を分析する力
- 論理立てて主張をまとめる力



○情報手段の基本的な操作

○プログラミング的思考

<現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力>

○芸術的な感性も生かし心豊かな生活や社会の価値を創り出す創造性

○グローバル化に対応した多様性の尊重

○あきらめないうで挑戦する力

「さいたま STEAMS 教育」を推進するにあたり、各教科等の授業において、STEM の視点を取り入れた教科等横断的な学習、探究的な学習の充実を図っている。また、令和4年度より「STEAMS TIME」を総合的な学習の時間に位置付けて実施している。「STEAMS TIME」は、子どもたち一人ひとりのワクワクを大切に、STEM を主軸として、各教科等ではぐくんだ資質・能力を活用しながら課題を解決する授業プログラムである。

2. 先行研究・実践

「さいたま STEAMS 教育」を推進するにあたり、これまでも先見的な取組を行い、その土壌を築いてきた。

(1) さいたま市立大宮北高等学校のスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の取組

市立大宮北高等学校では、平成28年度よりスーパーサイエンスハイスクールの指定により、理数教育について最先端の実績を積み重ねてきた。

○SSH行事

学校設定科目の「数理探究」、「福島復興探究学」、「SSHサイエンスフィールドワーク」等。

○SSHグローバルプログラム

「SSH台湾サイエンス研修」、「オーストラリア研修 (Model Global Stage)」等。

○地域の理数拠点校 (ワークショップ)

「自由研究サポートプログラム」、「中学生のための先進的科学的教育プログラム (ASEP Jr.Hi)」、「教員を対象とした STEAMS TIME Workshop」等。



中学生のための先進的科学的教育プログラム (ASEP Jr.Hi) での一場面

(2) STEM 教育海外派遣研修

平成30年・31年に、STEM 教育に関する海外研修を埼玉大学と連携して実施し、さいたま市からは、市立小・中・高等学校の教員が参加した。

平成30年 アメリカに4名派遣。

平成31年 イギリスに3名、ドイツに3名派遣。

令和2年1月29日の教育フォーラムにおいて、報告会を実施し、成果を市内に広く周知した。

(3) スポーツを科学する生徒の育成事業

令和元年度より、市立浦和南高等学校を皮切りに、運動部における「スマート部活動」の実現を目指し、DXツールを活用し、科学的かつ効率的な指導法を研究する「スポーツを科学する生徒の育成事業」に取り組んできた。導入した市立浦和南高等学校サッカー部では、アプリ等でデータを共有・活用し、個別最適化されたトレーニングを実現するとともに、自らコンディショニング管理等を行い、自己の心身の状況を適切に把握し活動に取り組む生徒が増えた。

令和2年度から令和4年度は、学校種や発達段階に応じた実証実験として、新たに市立中学校2校、小学校2校に事業を展開し、研究を進めている。

(4) 研究指定校による先行研究

令和2年度に、市立高等学校3校を核として、市立小学校6校、市立中学校6校がグループを組み、「さいたま STEAMS 教育研究指定校」として「STEM 分野」と「Sports 分野」の先行研究に取り組んできた。また、令和3年度には、

新たに「Art 分野」においても「さいたま STEAMS 教育研究指定校」を市立小・中学校から各1校委嘱した。

<令和2年度委嘱>

○市立大宮北高等学校グループ (STEM 分野)
大宮北小学校、日進小学校、大宮北中学校、日進中学校

○市立浦和高等学校グループ (STEM 分野)
北浦和小学校、つばさ小学校、本太中学校、浦和中学校

○市立浦和南高等学校グループ (Sports 分野)
沼影小学校、植竹小学校、内谷中学校、植竹中学校

<令和3年度委嘱>

○太田小学校、指扇中学校 (Art 分野)

令和3年度は、市立大宮北高等学校グループが STEM 分野の研究発表を行い、その成果を広く周知した。令和4年度は、市立浦和高等学校グループが STEM 分野、市立浦和南高等学校グループが Sports 分野の研究発表を行う。

3. STEAMS TIME

「STEAMS TIME」は、さいたま市立小・中学校の子どもたち全員を STEM 型の探究的な学びの入り口に立たせ

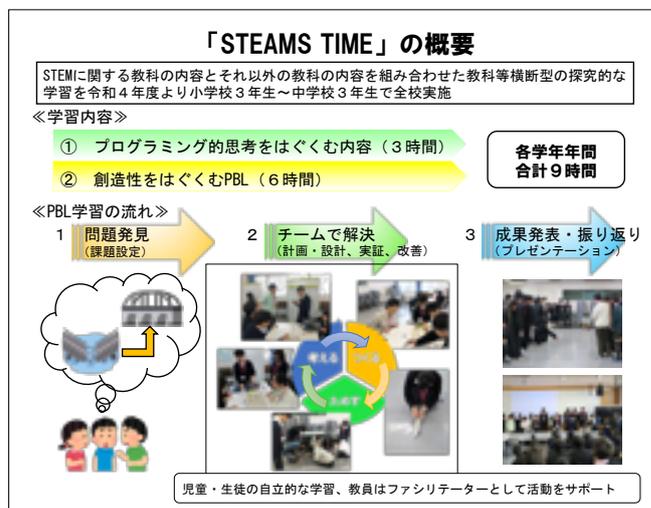
ることを目的としており、「さいたま STEAMS 教育」の要の時間である。小学校3年生から中学校3年生までの子どもを対象として、年間で「プログラミング的思考をはぐくむ内容」に3時間以上、「創造性をはぐくむ PBL」に6時間以上、合計9時間以上取り組んでいる。

<プログラミング的思考をはぐくむ内容>

コンピュータ等による情報処理を通じて、プログラミング的思考を活用しながら身近な問題を解決する学習。

<創造性をはぐくむ PBL >

実生活の中から課題を見だし、チームで調べ、考え、ためし、まとめ、成果を発表するという探究的な学び。全校で「STEAMS TIME」に取り組むために、「STEAMS



「STEAMS TIME」の概要

micro:bitでオリジナル作品をつくろう

活動の目的
micro:bitを使ったものづくり(作品づくり)を通して、プログラミングによって実際のものが動く仕組みを理解する。

準備物
・タブレット端末 ・micro:bitセット(本体、USBケーブル、電池ボックス、単3乾電池2本)
・その他必要に応じて材料(ミニムシクリップ、スピーカー、イヤホン等)

①活動のきっかけ(10分)
※活動のきっかけは、各学年がプログラミング学習の様々な場面で実施することに基づき、micro:bitを使って作品をつくろうとする意欲を高める、プログラミングとは何かを知る。

ポイント
生徒が得意で持ちやすいものを準備し、ミニムシクリップやワイヤなどの準備は先生が行う。

冷蔵庫内の温度を一定に保つ リモコンのボタンを押すと動作できる 体温を測定する

micro:bitでオリジナル作品をつくろう

②micro:bitの使い方を知る(40分)
(1) micro:bitの基本的なプログラミングの仕組みや機能について説明する。
○センサー：温度センサー、加速度センサー、磁気センサー、光センサー
○無線通信機能：Bluetoothで簡単にmicro:bit同士やタブレットを繋ぐことができる。
(2) 【例題】ハードウェアを表示する。をプログラミングする。
・全員で同じものを作り、micro:bitの基本的な使い方を理解する。
(3) オリジナルのマークをつくり、表示させる。プロジェクトを提出させる。(Teamsを利用)

③センサーを活用したプログラムをつくる(35分)
【例題】にそってプログラムを作成し、各センサーの使い方の理解を深める。
(1) 明るさセンサー 【例題1】明るくなると光る
(2) 温度センサー 【例題2】温度を表示しよう
(3) 加速度センサー 【例題3】ジャンプ
(4) 磁気センサー 【例題4】コンパス
※時間があれば(5) Bluetoothによる通信機能 【例題5】防犯装置
(参考文庫) 『micro:bitで遊ぼう!』(技術評論社)
『micro:bitで始めるプログラミング第2版』(O'REILLY)

④オリジナル作品のアイデアを考える(15分)

様々なセンサーや無線通信機能を使った作品を考える。
【例】
・冷蔵庫アラーム (明るさセンサー)
・磁気探知プログラム (磁気センサー)
・オルゴール (加速度センサー)

※マイクロビットの自動によっては、4人組や6人組で1つ作品を作ることが考えられます。
※次回までに、作成に必要な材料を用意しておく。各自で用意できるものは用意させる。
・画用紙、工作用紙、両面テープ、スピーカー(イヤホン)、ライト等

⑤オリジナル作品をつくる(50分)
(1) 前回考えたアイデアをもとに、オリジナル作品をつくる。
(2) 作品が完成したら、以下を記入した「作品紹介」をオンラインで提出させる。(スライドを利用)

①作品のタイトル
②作品の説明(どのような作品なのか?)
③作ったプログラム(プログラムをスクリーンショットする)
④写真や動画で、作品の様子を記録
【例】
①タイトル 温度検出
②何ボタンが押されている間だけ音が鳴り、音は明るさの値の10倍の明るさの音が鳴る。
③作ったプログラム
④作品の様子
・入出力端子にイヤホンを繋いでいます。
・手を近づけると音が鳴ります。

この画面をスクリーンショットして、オンライン等で送る。送って作成後作成後は、オンラインで提出すること。
①～④の「作品紹介」をそれぞれ作成する必要がある。

活動について

対象	中学校1年生、2年生
時間	3時間(～6時間、③×1時間、④×1時間、⑤×3時間)
さいたまSTEAMS教育で育成をめざす資質・能力	○情報手段の基本的な操作 ○プログラミング的思考 ○芸術的な感性も生かし心豊かな生活や社会の価値を創り出す創造性
STEAMS教育との関わり	Science Technology Engineering Art Mathematics Sports

「プログラミング的思考をはぐくむ内容」のコンテンツの一例

…マイクロビットを使ったものづくり(作品づくり)を通して、プログラミングによって実際にものが動く仕組みを理解する。

ごみプロジェクト～ごみをへらそう～

活動の目的

現在の地域や日本、世界が抱えるごみ問題から、学校の中で行うことができるごみへらしたの活動を考え、実際に取り組むことを通して、各教科で身につけた力を教科横断的に活用して問題を解決する力や他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力を育てる。

準備物

タブレット端末、必要資料

①活動のきっかけ（15分）

社会科の「くらしとごみ」の学習や環境センターの外出授業での話を思い出したり、さいたま市のごみの現状や、マイクログラスチックなどの世界的なごみ問題、SDGとごみの関連を資料に知りながら、ごみへの問題意識をもたせ、実際に自分たちでもごみを減らすための取り組みを行うという意図を高める。

ポイント

さいたま市の目標や取り組みについて知ることで、ごみ問題が身近な課題であることを認識させ、活動への関心を高めるようにする。

このままごみが増え続けると、ごみ焼却場の容量がいっぱいになってしまいます。なんとごみを減らす必要があります。

身近では、プラスチックごみの「マイクログラスチック」の問題が注目されています。

これらの問題を解決するためには、やはり、「ごみを減らす」必要があります。

様々なところでごみを減らす取り組みが行われている。自分たちでできることは何だろうか？

ごみプロジェクト～ごみをへらそう～

②ごみを減らすためにできることを考える（30分）

ごみを減らすための方法や工夫を調べ、なるべくたくさん書き出す。

- 出された方法や工夫の中から、「自分たちでもできそうの」や「効果がありそうの」という視点で分析し、取捨選択する。

生乳パックを持って、生ごみから紙製容器を分別がわかったよ。

クラスのごみはもっと減らせたいかな？分別ももっとできていないね・・・

パンフレットや紙類で分別がわかってよかった。

食べ残しを減らすと、フードロスも減って、ごみを減らせるんじゃないかな？

ポイント

提案されたアイデアを実際にごみを減らすことにどう取り組むかを、実際にごみ減らしの取り組みを通して、タブレット端末を活用して、情報を知る。

③グループに分かれ、活動計画をたてる（45分）

- 取ったアイデアの中で自分のやりたいことを選んでグループに分かれる。
- 【活動例】「クラスのごみをしっかりと分別しよう」「給食の食べ残しを減らそう」「生ごみから紙製容器を作ろう」「川に流れたごみを回収しよう」など
- 「必要なもの」「活動計画」「どのように活動するか」「効果などをどう発表するか」などの計画を立て、活動の発議をもつ。

ポイント

取組の目標を、どのように実行するかを考えた上で、取組の必要性に基づき、取組の計画で必要なデータを集めるようにする。また、取組の学習内容を、グループごとに整理し発表できるようにする。

④実際にやる（135分）

- ある提案作業が選んだところで中間発表を行う。
- 発表からのアドバイスや、他のグループの提案を参考に自分たちのグループの提案を修正し、改善する。
- タブレット端末を活用し、運営に必要なことを調べたり、各取組の進捗を詳しく報告の際に資料として提示したりできるようにする。

ポイント

「自分たちで考えたか」「どのように活用するか」「どのような効果があるか」などの視点から、多角的に分析し発議し直す。

⑤活動報告・振り返りをする（45分）

はじめは「難しい」と感じていたけれど、実際にやってみると、どうすればいいかわかってくるのを感じました。

自分たちでつくったものが実際に立つてくると嬉しかったです。これからもっと頑張りたいです。

グループで協力してごみを減らすことができました。ごみの問題を解決するために自分たちでできることを考えて、取り組んでいきたいと思います。

グループで協力してごみを減らすことができました。ごみの問題を解決するために自分たちでできることを考えて、取り組んでいきたいと思います。

ごみ以外の問題にも、自分たちでできることを考えて、取り組んでいきたいと思います。

ポイント

思ったものをつくることができなかったグループがあっても、課題を解決するために工夫してチャレンジした過程が大切だったことを伝えられるようにする。

活動について

対象	小学校4年生
時間	6時間
さいたまSTEAMS教育で育成をめざす資質・能力	○社会につながる問題発見・解決能力 ○あきらめないで挑戦する力
STEAMS教育との関わり	Science Technology Engineering Art Mathematics Sports

「創造性をはぐむPBL」のコンテンツの一例

…学校から出るごみを減らすための方法を、子どもたちが実験等をしながら考える。

TIME] ワーキンググループ立ち上げ「STEAMS TIME」のコンテンツを開発した。ワーキンググループのメンバーは、「さいたま STEAMS 教育」研究指定校の教員を中心に23名の委員で構成した。委員からの多くの実践やアイデアをもとに、導入資料（映像やスライド）やワークシートを含んだ授業コンテンツを作成した。

第2部では、さいたま市立大宮国際中等教育学校の田村守行教諭による、「ペーパーブリッジをつくろう」をテーマに「STEAMS TIME」の授業を体験した。参加者の教員は、重さに耐えられる強い橋を紙で作るために、グループ毎に話し合い、橋脚の形や橋げたの本数等を試行錯誤し、子どもたちと同じワクワク感を共有した。

4. 全校実施に向けた取組

令和4年度からの全校実施に当たり、各学校が見通しをもって計画的に教育課程に位置付けて取り組めるように、さいたま市教育委員会として次のような支援を行った。

(1) 希望（ゆめ）実現プロジェクト教育フォーラムの開催

「STEAMS TIME」を、令和4年度より実施するにあたり、そのキックオフ事業として、小・中学校の教員を対象に、令和3年7月6日(火)に「希望（ゆめ）実現プロジェクト教育フォーラム～『さいたま STEAMS 教育』の推進～」を開催した。

第1部では、「これが育てたいSTEAMS人材だ」と題し、教育長とソフトバンク ロボティクス株式会社取締役兼 CMO の蓮実一隆氏が教育対談を行い、「さいたま STEAMS 教育」に期待することについて、熱く意見を交わした。



重りをのせてどれほど耐えられるのかコンテストを行っている場面

(2) 「STEAMS TIME」コンテンツライブラリーの開設

教職員用の端末に、「STEAMS TIME」コンテンツライブラリーという専用のサイトを立ち上げた。この中には、前述した「STEAMS TIME」の授業コンテンツを格納するとともに、各省庁やメディアのリンクを貼ることで、各学校において「STEAMS TIME」を実践する際に、参考にできる環境を整えた。



コンテンツライブラリーのトップページ

(3) 校内組織への位置付け

各学校で、従来あった「総合的な学習の時間」の部会を「総合的な学習の時間（STEAMS TIME 推進）」の部会とし、「STEAMS TIME 主任」を新しく校務分掌に位置付けた。これにより、主任を中心に指導計画や研修計画等を組織的に作成することができた。

(4) 本年度の実践例

全校実施となった本年度、学校で実践している「STEAMS TIME」の授業例について紹介する。

- ①小学校第4学年(創造性をはぐくむPBL[けがを減らそう])
 - ・学校におけるけがの種類や場所、時間ごとのデータを整理・分析する活動を通して、児童がけがを減らす方法を考え、実際に取り組みながら、効果的な解決方法を見付け出し、1・2年生に分かりやすく伝える授業。
 - ・子どもたちからは、「ポスターに使う色は遠くからでも目立つ色にしたいけど、何色がいいかな」「廊下に貼るテープは、幅が太い方が見やすいよね」等、よりよい課題解決に向けて、お互いの意見を積極的に取り入れながら試行錯誤する姿が見られた。



けがが多く発生している場所で、掲示するポスターの見やすい高さを考えている様子

②中学校第3学年(プログラミング的思考をはぐくむ内容「学校生活をよりよくするプログラムを考えよう」)

- ・身の回りにあるプログラムを応用すれば暮らしがよりよくなることを理解したうえで、生徒が一人一台ずつプログラミング教材（マイクロビット）を活用し、実際に学校生活をよりよくするプログラムを作る授業。
- ・生徒は、作ったプログラムを友達に試してもらい、改善点等のアドバイスを基に問題点を分析し、よりよいプログラムにするため、諦めずに改良を続ける姿が見られた。



プログラミング教材（マイクロビット）を活用した授業の様子

おわりに

これからの時代には、主体的に学び、他者と議論し納得解を導き出したり、新しい価値を生み出したりする力が必要である。これは、まさに「さいたま STEAMS 教育」の探究的な学びで身に付けることができる能力である。

さいたま市教育委員会では、「さいたま STEAMS 教育」を推進することで、教科等横断型の探究的な学びの充実を図っていくとともに、本年度、全校実施となった「STEAMS TIME」を通して、子どもたちに、自分自身の興味関心という内なる世界と、社会や学術という外の世界を深めながら繋いでいく、ワクワクするような学びを届けるため、これからも積極的に学校の支援を行っていきたい。

不登校児童生徒のための 中間教室の多様化を模索して

はじめに

不登校児童生徒の増加が全国的な問題となってどのくらい経つのだろうか。校内暴力を含む学校の荒れが問題になっていたのが、荒れが収まるのに合わせるように、児童生徒が家にこもるといふ不登校の問題が表に出てきた。

長野県では、小中学生の不登校問題が様々な場面で取り上げられてきた。全国的にみても、不登校になる児童生徒の割合が高く、対応が求められてきた。県教育委員会は、独自の「不登校への対応の手引き」を作成し、具体的な方策を示してきた。

伊那市でも不登校児童生徒の増加は教育現場の大きな課題の一つとして、各校がその改善に努めてきた。それでもなかなか改善できない中、伊那市教育委員会では、新たな不登校が減少するための取り組みや児童生徒の居場所について、再検討をしてきた。本レポートはその取り組みについてまとめた。

1. 不登校の実態

		平成30年度	令和元年度	令和2年度
小学校	全児童数 (人)	3,647	3,574	3,478
	不登校数 (人)	25	29	28
	割合	0,69%	0,81%	0,81%
中学校	全生徒数 (人)	1,998	1,984	1,923
	不登校数 (人)	56	55	60
	割合	2,80%	2,77%	3,12%

伊那市の不登校児童・生徒数の経年変化をみると全体として増加傾向にあり、小学校・中学校ともに不登校の割合は全国平均とほぼ同じになっている。30日以上欠席した児童・生徒数は平成25年度と令和2年度を比較すると小・中ともに倍になっている。この10年での不登校の増加は顕著であると言わざるを得ない。

2. 新たな不登校を生まないために

□ 伊那市の取組…21校が共通しての取組

本市ではここ数年間、不登校対応の重点を「**新たな不登校児童・生徒を出さない取り組みを!!**」として小中学校全校が次のように取り組んだ。

- ・担任は学級の子どもの登校渋りの兆しを素早く察知して報告する
- ・担任からの報告を受け、直ちにチームで支援を始める
- ・新たな不登校児童・生徒を生まない取り組みに学校全体で取り組む
- ・上記の意識を全職員に持たせる
- ・児童・生徒の最適な居場所を考え、一步を踏み出させる支援を

- ・不登校対策に、入学時から学年（チーム）で早めに取り組み、2年次には不登校を減少させた例もある。このやり方が学校・他学年に伝播して同様な対応ができるようになる。
- ・不登校児童・生徒が多い学校では、不登校対策を、学校課題の大きな柱の一つと捉えられ、学校や学年や職員が連携して不登校対応にあたる。不登校の兆しをいかに早く察知するか、そしてどう支援していくか。「このごろ休みが多くなって心配だなあ、どうしたのかなあ、今日も欠席かあ」と担任が思っている間に、

根は深くなっていく。

- ・学校・学年の連携とは、担任が不登校の兆しを察知したら、すぐに連絡して関係職員で取り組むことで、教頭や学年主任、あるいは係が中心になって担任を支援している学校は新たな不登校児童・生徒が生まれにくい。

□ 一年の中で特に注意をしていく時

- ・5月の連休明け
- ・夏休み明け
- ・運動会の前後
- ・音楽会の前後
- ・文化祭の前後
- ・大きな行事が終わった後
- ・年末年始休みの後
- ・人間関係にもまれた後
- ・自分の力のなさを劣等感として感じた時

以上の時を見逃さず、児童・生徒が困難と立ち向かっている状況を待つのではなく、その都度学校から働きかけを行っていく。

- ・不登校の原因が、家庭に起因するものも少なくない。学校だけでは解決が難しい状況もある。市や県などの外部機関等とも積極的に連携を進めていく。

以上の取り組みで、ことに不登校が増加する時を見逃さず、学校から働きかけていくことが定着してきた。そのことにより例えば、夏休み明けの不登校数が減少。事前に宿題を見てあげたり、宿題の簡易化を図ったり、始業式直前の家庭訪問をしたりと取り組みの成果が出てきた。とはいえ、全体の総数の減少にはなかなかつながっていないのが現状である。

3. 不登校児童生徒の居場所づくりについて

(1) これまでの伊那市中間教室

本市では、「学校での集団生活になじめない」「人との関係づくりに苦しさを感じている」などの理由で登校できない市内外小中学校の児童生徒のために、中間教室（やまびこ学級）を設け、適応指導員が「安心して過ごせる居場所」「そのらしさを大事にした自立支援、学習支援をしていく場所」となるようサポートをしている。

令和2年度の間接教室には小学生3名、中学生12名が通室していた。

本市では令和3年度、前述2と併せて児童生徒を受け入れる中間教室のさらなる機能向上に向け、児童生徒や保護者のニーズに応えられるよう多様化を図ることにした。



これまでの中間教室の内容

◇開設日・開設時間

市内小中学校の登校日に合わせる
原則9時00分～15時00分

◇中間教室（やまびこ学級）の過ごし方

中間教室では「他の人に迷惑をかけない」ことを約束事とし、迷惑をかけなければ自分の好きなことをやっていいことにしている。

学習をする時間が多い児童生徒もいれば、趣味的なことをする時間が多い児童生徒もいて、自分では決められないという子どももいるので、本人や保護者の方と相談しながら取り組みを進められるようにしている。

◇教科学習について

学習については、基本的には「その子のペースで、その子に応じて」と考えており、「自分で学習内容を決め、自分で進めたい」「小学校の○年生の学習からやり直したい」「学習する時間も自分で決めたい」など、願いに添って支援している。学校で使用する問題集をテキストにして学習する機会が多いが、子どもにあったテキストを適応指導員が用意して学習を進めることもある。また、学校で使用しているタブレット端末を使用して学習することもできる。

◇学習以外でやっている主な活動

本や漫画を読んだり、イラストを描いたり、折り紙・切り絵のような工作をしたりしている。小学部は室内外での運動や調理をすることもある。

(2) 令和3年度の取組

①コーディネーターの配置と中間教室の見直し

令和3年度伊那市教育委員会では、不登校対応として

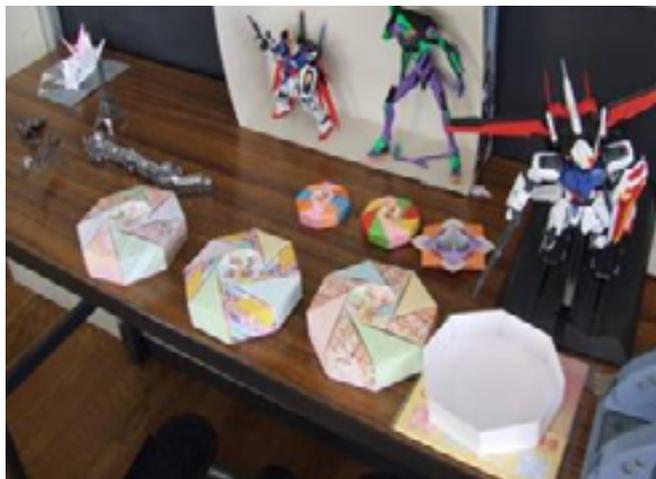
専門のコーディネーターを配置した。その職員は不登校児童生徒や保護者と直接面談をしたり、学校へ出向いて相談や支援をしたり、中間教室で児童生徒に指導をしたりと多様に対応した。その結果不登校児童生徒がそのままの状態で見られる状況が減少した。また、コーディネーターは、現存の中間教室が昼間のみ受け入れで、かつ市内の中心部に1カ所あるだけであることから、原則保護者の送迎が可能な児童生徒に限られ、通室したくても出来ない状況があった事を踏まえ、幅広い活用ができるよう開設時間と開設場所を改めて考え直し、教育委員会に新たな中間教室を提案した。

②夜の中間教室と寺子屋の開設

◇夜の中間教室

家からは中間教室（やまびこ学級）が遠くて自力で通うのが難しい、あるいは夜間の方が活動しやすいという小中学生のために、また仕事を終えた保護者の送迎がしやすい夜間に中間教室を開設することにした。

- ・ 教室開設日毎週月曜日～水曜日
- ・ 教室開設時間 17時30分～20時00分
- ☆どの時間でもOK
- ・ 教室の場所 中間教室（やまびこ学級）
- ・ 支援員を1名配置



◇寺子屋の開設

中間教室（やまびこ学級）の分室として、市内4カ所の公民館等に「寺子屋」を開設した。現存の中間教室（やまびこ学級）は遠くてなかなか通えなかったという小中学生が、家の近くで過ごせる居場所として「寺子屋」を始めた。

- ・ 開設時間は13時00分～16時00分
- ☆どの時間でもOK

- ・ 開設場所 月曜日 西箕輪寺子屋
火曜日 高遠寺子屋
水曜日 手良子屋
木曜日 美篤寺子屋
- ・ 支援員を1名配置

(3) 夜間・寺子屋の開設と中間教室活用の変化

年度	分野	利用者総数	学校復帰
令和2年度	小学部	3人	1人
	中学部	12	1
令和3年度	小学部	9	0
	中学部	22	2
	夜間部	10	0
	寺子屋	11	0

中間教室を幅広く活用できるように改善を進めてきた。送迎や生活基準に合わせた「夜の中間教室」、自宅の近くに居場所を提供する「寺子屋」の開設により、上記の表のとおり自宅に閉じこもっていた児童生徒が動き出すことができた。

◆通室した生徒の感想 2名の生徒

夜の中間教室と寺子屋に通って

私は、学校に行けなくて、家にいましたが、退屈で誰かと話したいと思っていました。そんな時、夜の中間教室が始まると聞いて、すぐに行きたいと思いました。通っているうちに先生が面白くて優しい先生だなと思うようになりました。夜の中間教室にはだんだんと人が来るようになりました。その中で友達ができ話をしたり盛り上がりたりしました。高校進学が近かったので、先生に数学を教えてもらったり進路相談にのってもらったりしました。昼間は寺子屋も始まったので通うようになりました。寺子屋は小学生や中学生が来て話をしたり勉強をしたりと、楽しい思い出が作れました。学校にはあまり行けなかったけれど、夜の中間や寺子屋に行ってみて本当に良かったと思っています。（中3K・K）

夜の中間教室と寺子屋に通って思うこと

家にずっといると退屈だと思ふ時がある。僕もその一人で2年近くずっと家でだらだらと過ごしていた。そんなある日、ソーシャルワーカーさんが訪ねてきて「中間教

室」の話をしてくれた。話を聞いているうちに面白そうだなと思い、行ってみようと思った。僕は夜の間教室に行きました。先生は一人一人と向き合って元気で明るい人だなと思っていました。でも仲良くなるにつれてそれだけじゃなくしっかりした考えをもって尊敬できる人だと思うようになりました。数ヶ月したころから地元の寺子屋にも行くようになりました。寺子屋では3人が通ってきていて、一人は礼儀正しくて、もう一人は元気が良すぎて、僕も同年代の人と会話をするので、緊張はあったものの、数回でうちとけて居心地のいい空間でした。中間教室に来ている人たちとすぐ喋ったわけではないけれど、お互いの個性を理解してあげられる人が多くて、話していて気持ちが楽になるところでした。長続きのしない僕が卒業するまで続けられたので一度は行ってみる価値が100パーセントと言っているほどあるので、学校へ行かない人は中間教室に行って、今の自分にとって大切なものが見つければいいと思います。(中3 N・S)

(4) 個に合わせたふれあい活動

中間教室を利用する児童生徒には人とのかかわりを嫌がる子が多い。したがって窓際を向いて一人の空間内で過ごしている児童生徒が多い。なかには個室を希望する児童生徒もいる。夜間中間教室や寺子屋では、「かかわり」という課題を持つ子らにあえて個に合わせたふれあい活動を進めてきた。

その中で焼き肉会と出発式を紹介する。

◇焼き肉会

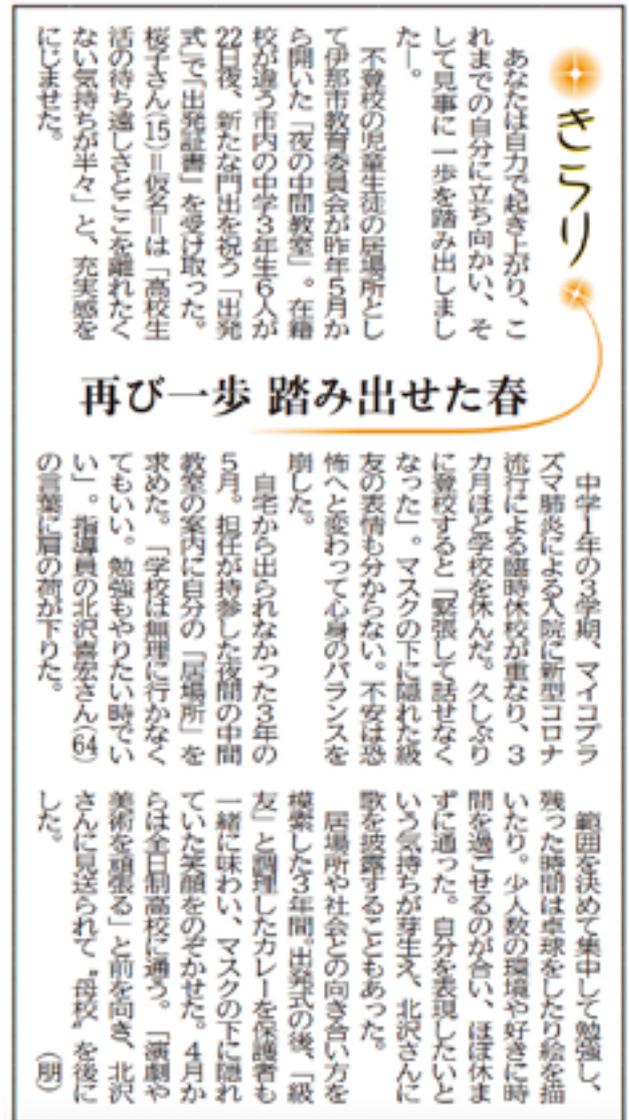
7月の最終週に夜間中間に通室してきた生徒たちが玄関前に炭をおこし焼き肉会を実施した。なかには、鶏肉しか食べられないからと家から鶏肉を持参した生徒もいた。火を囲んで自然と会話が出来、なかなか話せなかった仲間と交流ができた。そのあとの花火は盛り上がったの交流となった。

◇出発式

不登校を経て中学を卒業した3年生の心新たな門出を周りの大人や仲間が祝い励まして送り出すことで、3年生が勇気をもって新たな一歩を踏み出せることを願って3月の末に「出発式」を実施した。生徒たちとカレーを作り、式のあとは保護者と一緒に食事をした。大人数の中でともに時間を過ごし、4月からの新たな出発の準備となった。

◆出発式を終えた後の新聞の記事より

令和4年3月31日信濃毎日新聞



(5) 新たな寺子屋の設置をめざして

昨年度の改善の上に令和4年度は、一日寺子屋の開設を図ったり、子どもたちの希望にそった幅の広い活動を取り入れたいと考えている。

◇一日寺子屋(伊宝館)の概要

家に閉じこもっている児童生徒に働きかけ、週に1日だけ学校ではない寺子屋に来て、自分で決めた日課で過ごす。

- ・寺子屋の場所 使用していない教員住宅を活用(備品類は活用しない市の備品を借用する)
- ・時間 毎週木曜日 9:00～16:00
- ・昼食 自分たちで作って食べる
- ・特色のある活動 食べるものは自分で作ることを大切

にした畑づくり。水泳（体力の向上を目指して近くのスイミング施設を利用させていただく）

- ・インターネット関係設置
- ・支援員 1名配置
- ・開設日 9月1日～

◇幅の広い活動を取り入れていく

中間教室に通室してきた児童生徒たちにやってほしいことややりたいことはなにかと問うと、学校で行われている行事をしたいと言う。一方で不登校故に将来のことを深く考えている児童生徒も多く、キャリアについて学びたいと思っている。そこで、本年度は、中間教室の様々な場で、児童生徒が希望する活動を関係団体と協力・連携しながら実施していきたいと考えている。

具体例として 木工教室、粘土・焼き物、華道・茶道、音楽・ギター、演劇、ネットアニメ、農業体験、工場見学、仕事調べ、農家の手伝い、川遊び、焼き肉、花火大会、焼き芋、ハロウィン、餅つき、クリスマス会、そば打ち、卒業式パン作り、親子カレー会、親子焚火の会、五平餅の会 等

おわりに

本市の不登校児童生徒数は相変わらず多い。そういう児童生徒に、今までは何とかして学校復帰を促そうとしてきた。それはそれで大事なことであり、これからも学校復帰に向けた支援を続けていく。一方で、担当者は不登校の児童生徒に接することで、児童生徒が学校ではない居場所を見つけて、そこで学んだりコミュニケーションを図ったりすることも積極的に認め支援していくことが大切になっているとの思いを強めている。伊那市では今後も児童生徒の居場所づくりを民間団体とも協力連携しながら開拓していきたいと考えている。

山江村「海幸・山幸交流プロジェクト2021」

～令和2年7月豪雨からの復興を目指す「鎮山親水」の取り組み～

はじめに

山江村は、熊本県の南部に位置し、人口3300人余りの小さな村である。特産物としては栗が有名である。1977年には昭和天皇に献上栗として納められている。村の9割が山地という自然豊かな地域で、農林業が主産業である。また村内には2つの小学校と1つの中学校があり、児童生徒350人が毎日熱心に学んでいる。

山江村内小中学校

二つの小学校と一つの中学校

児童生徒数	
山田小学校	181人
万江小学校	40人
山江中学校	129人
(令和4年5月現在)	





山江村の小中学校

本村は2011年、文部科学省のICT教育活用の調査研究事業の指定を受け、全国に先駆けて学校におけるICT教育の研究に取り組み始めた。

教師の授業改善を図り、子どもたちの学力向上を図りたいとの思いからであった。この10年間でICT教育は子どもたちの主体的な学びを確かなものにし、今では、学習道具の1つとして日常的に活用している。毎年、研究発表会を開催し、全国から300人程度の先生方が参加され、ICT活用について議論が交わされている。

昨年10月には「山江村ICT教育10年の軌跡」と題し、研究発表会が行われ、オンラインでのライブ配信であったが全国から500人程度の参加があった。

今回のプロジェクトもこれまでのICT教育の取り組みによりスムーズな交流へと繋がり確かな実践を行うことができた。



ICT活用による主体的な学び

1. 災害からの復旧・復興

令和2年7月豪雨では、人吉球磨地域全体で大きな被害を受けた。河川の氾濫や土砂崩落で65人が犠牲となり、現在も2名が行方不明である。山江村でも同様に土砂災害や河川の氾濫による浸水被害、山腹崩壊などが発生し、人的被害はなかったものの、住家や道路、水道施設など生活基盤や基幹産業である農林業や地場産業などに甚大な被害を受けた。災害からの一日も早い復旧・復興を図るため「鎮山親水」（自然との共生意識や畏敬の念を持ち自然に親しむと同時に怖さを知り、自然との関わり方を見直す、人と自然との調和）を基本理念とした山江村復興計画を策定した。



山江村復興計画

(1) 被災状況を知る

将来を担う子どもたちが山江村をどう作っていくか考えさせる取り組みとして、子どもたち(小学校5, 6年生)が熊本県や山江村の職員等で作る災害検証及復旧復興委員会の方々に同行し、被災状況を見学した。



万江川の氾濫により滑落した県道

川の近くにお住いの方が増水した川の水が堤防を越え、車を押し流した当時の様子をタブレットで動画を見せながら説明された。

その他にも避難所での食事やトイレ事情等にも触れられ、被災当時の住民の方々の生の声を聞くことができた。

改めて災害の怖さを感じ、これから自分たちにできることは何かをしっかりと認識することができた。環境保全に努めることの大切さを改めて感じたようである。



国交省及び被災住民からの説明

(2) オンラインによる交流活動

災害状況を目の当たりにした子どもたちは、「どうしたら災害を防げるか」「自分たちにできることは何か」などいろいろ議論を交わした。同時に総合的な学習の中で川の上流の被害とともに下流の河口付近に材木やペットボトルなどが流れついて漁業にも影響を及ぼしていること等を学んだ。

特に八代市の河口で漁業を営まれている方から球磨川上流から流れてきた材木の影響で船が出せず生業が成り立たないという生の声も聞くことができた。そこで、今回の災害の主流となった球磨川を介して、上流と下流でつながっている八代市の河口に位置する小学校とオンラインでの環境学習を行った。それぞれの学校で被害の状況を報告し合った。

球磨川の上流に位置する山江村の被害状況、八代市河口の被害状況、そして山江村と八代市が一本の川でつながっていることを知り、今後環境問題や防災について一緒に取り組んでいくことを確認し合った。

オンライン学習を続けていく中で、お互いの学校から実践活動の提案があった。

山江村の小学校からは山を守る活動として一緒に植樹をやりましょうという提案が、八代市の小学校からは小学校近くの河口の清掃活動を一緒にやりましょうという提案がそれぞれの学校からあった。

そこで、山と海のつながりを再認識し、ふるさとの豊かな森、川、海を次世代に引き継ぐことを目指して、海幸・山幸交流プロジェクトに取り組むこととした。



オンラインによる交流授業

2. 海幸・山幸交流プロジェクト

(1) 海幸交流プロジェクト

令和2年の7月豪雨により山などから流出した流木等は球磨川下流域の八代市河口付近の環境にも多大な被害を及ぼし、漁業従事者の船が漁に出られなかったり、漁をする網にも絡みつき破れて使えなかったりしたことなど、八代市河口の小学校とのオンライン学習により学ぶことができた。

そこで、海幸交流プロジェクトは八代市河口付近に流れ着いた流木等を除去する活動に取り組んだ。山江村の子どもたちは上流の流木が海まで流れてきていることに大変驚いた様子だった。約1時間の活動であったがたくさん集められた流木、ペットボトル等を分別したりしながら、環境を守っていくことの大切さにも気づいたようであった。また、持続可能な故郷を創っていくため自分にできることを積極的に取り組んでいくことも誓った。



河口付近の清掃活動をする子どもたち

(2) 山幸交流プロジェクト

今回の7月豪雨では、山が崩れて多くの木々が流木となって川に流れだすなどの山腹崩壊が発生し、住宅や道路の生活基盤や農林業などに甚大な被害が発生した。そのことから、これまでの学習を踏まえ、子どもたちは森林整備活動を通じて山と海のつながりを再認識し、森林を守り育てていくことの大切さを強く感じた。そこで、八代市の小学校の子どもたちと山江村の小学校の子どもたちで山幸交流プロジェクトとして植樹活動に取り組んだ。山江村の0.2haほどの山腹にコナラの苗木100本ほどを一本一本思いを込めて植えていった。植樹を終えた子どもたちからは、「植樹で緑に触れ合うことができ、植えた苗木が大きくなるのが楽しみだ。」「自然の素晴らしさや役割を学び、八代市の小学校の友だちとともに豊かな緑を守り育てていきたい。」と将来の災害に負けない森林づくりに使命感を抱いていた。今後もこれらの活動を続けながら災害に強い森林づくりに取り組んでいく。



森を守る植樹活動

おわりに

令和2年の7月豪雨を機に防災の機運は一気に高まった。また、この災害を次世代へつなぎ、持続可能な村を創るためにも子どもたちの役割は大きい。子どもたちがこの災害を自分のこととしてしっかりと理解し、防災意識と環境問題を考えるいい機会となった。将来、いつ起こるかわからない災害、今後SDGSの観点から環境問題にしっかりと取り組むとともに、災害時には今回の経験を活かしリーダーとなって復旧・復興に貢献してくれるものと確信している。

今後もこの海幸・山幸交流プロジェクトを継続しながら交流をさらに深め、環境問題について学習していく予定である。同時に今回の子どもたちの活動が八代市の小学校の地域住民や山江村民の心を動かし、環境に対する関心が大きく高まった。八代市の河口では「河川・浜辺大そうじ大会」が開催されたり、山江村の山林では、山を荒らす鳥獣の一斉駆除や植林活動などの山を守る活動が盛んに行われている。

今世界中で環境破壊が原因とされる災害が数多く発生している。地球温暖化などいろんな影響が関連していると思われるが、今回身近に大きな災害が発生し、一段と危機感を感じている。

今回の活動を通して子どもたちは環境を守っていくことの大切さを学んだ。この子どもたちがこれからの時代、災害のない豊かな環境や社会を創っていかれると信じている。子どもたちへの期待は大きい。



自然を大切にし住みよい地球環境を守るぞ!!

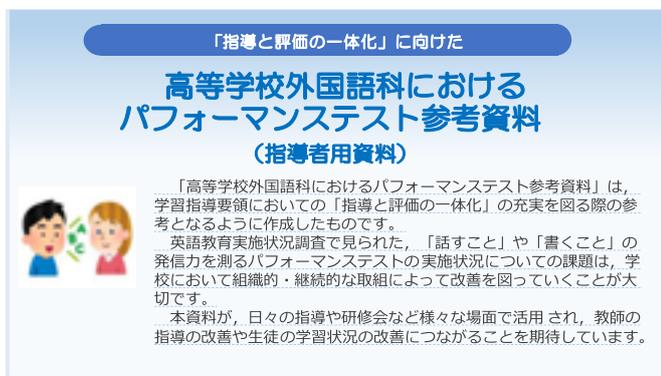
「高等学校外国語科における パフォーマンステスト参考資料」について

文部科学省初等中等教育局教育課程課 外国語教育推進室

1. はじめに

本年度より、高等学校において新学習指導要領が年次進行でスタートし、外国語科では、4技能5領域の指導を一層充実させ、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指しています。しかし、高等学校における発信力の育成の取組、特に「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」の3領域におけるパフォーマンステストの実施状況については、改善の余地が見られるところです。

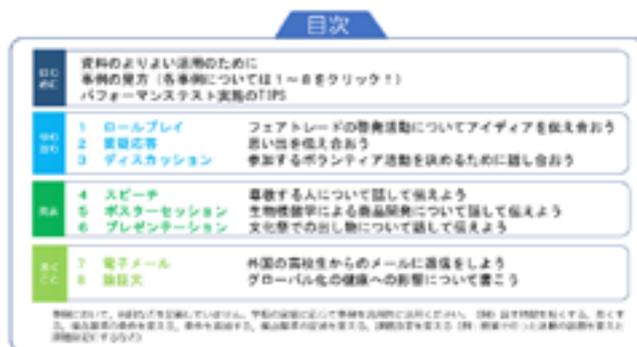
そこで、外国語教育推進室では、これらの3領域の指導に資するよう「高等学校外国語科におけるパフォーマンステスト参考資料」（以下「参考資料」）を作成しました（図1参照）。



(図1)

2. 「参考資料」の内容

冒頭では、「参考資料」の活用方法や事例の見方などを紹介しています。本編では、8つの事例（「話すこと [やり取り]」3事例、「話すこと [発表]」3事例、「書くこと」2事例）を提示しており、各事例でそれぞれ異なるテスト形式を紹介しています（図2参照）。



(図2)

また、各事例では、評価規準や準備物、採点の基準、生徒の発話例・作文例とそれに対する採点の例など、実践的な情報を豊富に盛り込んでおり、各自治体・学校の研修等の場ですぐにご活用いただける内容となっています。

さらに、各事例では、「指導と評価の一体化」を円滑に進めていただくために、テストの実施方法だけでなく、単元の目標に準拠したパフォーマンステストや指導を行うためのポイントを提示しています。

3. 最後に

パフォーマンステストの実施に当たっては、「参考資料」の各事例を基に、生徒の達成度を適切に測る内容となっているか、テストまでの指導が目標と一貫したものとなっているか、といった点を意識していただければと思います。パフォーマンステストが学校現場において円滑に実施され、「指導と評価の一体化」が実現されるよう、「参考資料」を積極的にご活用いただくようお願いします。

（「参考資料」はコチラから→）



OECD国際成人力調査(PIAAC)の実施について

国立教育政策研究所

国立教育政策研究所では、本年度、OECD（経済協力開発機構）が主催する国際成人力調査（PIAAC:ピアック）の現地調査を行います。

1. 調査の趣旨

この調査は、社会や日常生活で用いるスキルを測定し、教育及び学習の成果が社会や日常生活でどのように活かされているかを、収集されたデータを基に国際比較分析する国際共同調査です。その結果を各国での今後の教育政策等の立案に役立てることを目的としています。

約10年前の2011年に第1回が実施され、今回は第2回の調査となります。OECD加盟国を中心とした日本を含む30か国以上が参加する予定です。国立教育政策研究所は国内実施機関であり、事務局を生涯学習政策研究部が担当し、個々の調査業務は委託を受けた（株）日経リサーチが行います。

2. 調査の概要

実施の概要は以下のとおりです。

- ① 実施時期：令和4年（2022年）9月～令和5年（2023年）3月予定
- ② 対象：16歳から65歳の約1万人の成人
- ③ 内容：回答者自身の学歴、職歴、収入、学習活動への参加状況などを尋ねる「背景調査（Background Questionnaire）」と、日常生活での様々な場面で、文章や図などの形で提供された情報を理解し、課題の解決に活用する力を「読解力」、「数的思考力」、「状況の変化に応じた問題解決能力」の3分野の側面から調べる「直接評価（Direct Assessment）」で構成。
- ④ 方法：タブレットを用いた対面方式で実施。背景調査は調査員によるインタビュー形式、直接評価は回答者本人によるタブレット入力で行う。
- ⑤ 結果の公表：調査終了後に個人が特定されないよう処理されたデータをOECDが集計・分析し、統計的に処理された形で国際比較した結果の公表を、令和6年（2024年）12月以降に予定。



直接評価の3つの分野

- ① 読解力 (Literacy)

文章や図表を理解し、評価し、活用する力
例) ホテルにある電話のかけ方の説明を読んで、指定された相手に電話をかけるにはどのように操作したらよいかを答える。
- ② 数的思考力 (Numeracy)

数的な情報や内容を用いて論理的に考える力
例) 商品の成分表示を見て許容摂取量を答える。
- ③ 状況の変化に応じた問題解決能力 (Adaptive Problem Solving)

条件や状況の変化によって生じる新たな問題を把握し、適切な解決に導く力
例) 複数の人のスケジュールを、当日の予定や会場の都合の変化に応じて適切に調整する。

3. 調査対象者への依頼方法

住民基本台帳から無作為に抽出された調査対象者へは、次のような方法で調査を依頼します。

① 対象者に依頼状を送付します

対象者として選ばれた方に、調査への協力をお願いする文書をあらかじめ送付します。

② 調査員が訪問し、日程調整をします

調査員がご自宅を訪問し、調査する日時を調整します。調査はご自宅か、希望に応じて公民館などお近くの施設を利用することを予定しています。

③ 指定した日時に調査を行います

約束した日時に調査員が調査対象者と1対1で調査を行います。

4. 調査へのご協力をお願い

正確な調査結果を引き出すには、より多くの方から回答を収集する必要があります。もし、御自身のもとに調査依頼が届きましたら、是非とも回答にご協力いただきますようお願いいたします。

また、回答していただく場所として、最寄りの公民館等を使わせていただくこともあると思います。教育委員会及び民館等関係者におかれましては、調査員から施設内の利用について相談がありましたら、ご理解いただけますと幸いです。

(調査についてのお問合せ)

国立教育政策研究所生涯学習政策研究部

HP : <https://www.nier.go.jp>

mail : piaac@nier.go.jp

第1回調査及び結果の概要

第1回調査は平成23年(2011年)にOECD加盟国など24か国が参加して行われました。日本では第2回と同じ国立教育政策研究所が国内調査の実施機関となって、全国から抽出した16歳から65歳までの11,000人の成人を対象に調査を行いました。

調査内容は、第2回と同様の背景調査と「読解力」「数的思考力」「ITを活用した問題解決能力」の3つの側面から調べる直接評価で構成され、背景調査は調査員のインタビュー形式、直接評価は本人がパソコン入力または状況に応じて問題用紙に書き込む方法で行われました。

調査結果は平成25年(2013年)10月に公表され、日本は読解力、数的思考力の2分野における平均得点で、参加国の第1位でした。

また、読解力、数的思考力の平均得点を年齢グループ別でみると、どの年齢グループでもOECD平均を上回っていて、30歳前後でピークを迎えた後、徐々に低下していく傾向にある他国に比べ、加齢にもかかわらず高い水準を維持していることがわかりました。

ひとりごと

楽しみ

4月から研修生として日々業務に追われ東京で過ごすうちにはや数か月が過ぎ、街を歩けば街路樹から響き渡るセミの声、ビルの窓に反射する青空と白い雲…東京に夏がきた。

「夏の楽しみ」といえば何を思い出すだろうか。花火大会、暑気払い（ここ数年開催できてはこないが毎年の楽しみだ）、海や川での水遊びなど人それぞれ思い浮かべるものがあると思う。私もさまざまな夏の楽しみがあるが、その中の1つに夏休み期間にラジオで放送される「子ども科学電話相談室」がある。子ども達が日々素朴に感じた疑問をメールや電話で募集し、スタジオにいる数人の各分野の専門家が質問に答えるご長寿番組で聞いたことがある方もいるのではないかと思う。私自身が子どもの時は存在すら知らずにスルーしていたが、大人になり SNS のトレンドに上がっているのを見て初めて知った。それからは子どもと専門家のやりとりが非常に面白く、すっかりはまってしまった。「お茶碗のごはんよりも、おにぎりのほうが美味しいのはなぜ?」「新しい元素はどうやって作るのですか?」子どもらしい純粋で微笑ましい質問や小中学生とは思えない中々に専門的な質問が多く寄せられる。しかも、対する専門家の回答がどれもなるほど納得したり、更に調べてみよう試してみよう!と思わせたりする見事なものばかりである。

先日も出勤時間の暇つぶしに、と聞き逃し配信を聞いている時のことだった。過去に質問をした子どもにその後どうなったかを聞いてみようというコーナーがあり、数年前に「寒い日に水とお湯を置いたらお湯のほうが早く凍りました。なぜですか?」と質問した子どもが出演していた。質問後も何度か実験を繰り返し替えており、仮説をたてて試していることがよくわかる。対して専門家も観察の仕方や容器を変えることなど更に詳しくアドバイスをし、今後も実験続けてくださいと勧める。

そんなやりとりを聞いていると、何かを発見することやとことん調べたり考えたりすることの楽しさや醍醐味に改めて気づかされる。普段何気なく過ごしているが、日常の中にも疑問や発見のきっかけは多くあるのではないだろうか。それらを敏感に察知し、追及できるようにアンテナを張りながら過ごしていきたいと思う。今日もまた、昨日とはまた違う発見をし、毎日を充実させ楽しみたい。

(K.K)

あ と が き

■ シリーズ「地方発!我が教育委員会の取組」として、さいたま市、長野県伊那市、熊本県山江村の各教育委員会から、取組のご紹介をいただきました。多種多様な取組をぜひご覧ください。

■ お知らせは、初等中等教育局教育課程課 外国語教育推進室より「[高等学校外国語科におけるパフォーマンステスト参考資料] について」と国立教育政策研究所より「OECD国際成人力調査 (PIAAC) の実施について」の2点です。

■ 猛暑もようやく過ぎ去り、秋風の心地よい時節となりました。学校では新学期が始まり、子どもたちが元気に通学する姿を見かけるようになりました。

シルバーウィークのご予定はもうお済みでしょうか。寒い冬が来る前に、出来ることは沢山やっておきたいものですね。

食欲の秋、栗やさつまいも、梨など、美味しいものが多い季節ですが、食べ過ぎには気を付けたいと思います。

「教育委員会月報 令和4年9月号 No.875」

- ・発行・著作 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課
- ・〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
- ・TEL : 03-5253-4111(代表)
- ・URL : <https://www.mext.go.jp>



文部科学省